こういう世相の中でも絵を愛し、描くことに楽しみを見出し、悩みながら描き続けてゆく人々がいる限り、より一層の努力をして発展して行くことなのでしょう。

魅力ある新日美展にしてゆく為のお手伝いが出来ればと思っています。大変微力なので戦力になれるものか不確かですが、皆様のご指導を頂きながら協力させて頂ければと思っております。

よろしくお願いします。

焼き物の街　常滑に魅せられて

石原　修

兵庫県尼崎市に住んでいた頃、知多半島の河和にある会社の保養所に家族総出で出掛けた時の事です。

家族総出といっても家内と小学校に上がる前の長男の三人、いや、お腹の中で暴れ回っている次男がいましたので三・五人？

ドライブを楽しみながら保養所に向う途中常滑の街を通りがかると、天を突き差す煙突群が、目前に飛び込んで来ました。常滑の焼物工場はスケッチポイントとして考えていませんでしたので、これには大変な驚きと興奮を覚えました。

もうすぐ六歳になる長男は、登り下りの多い路地に規律正しく、あるいは無造作に積み上げられた土管や甕の間を走り回り、時折スケッチに夢中の私の傍に来ては、彼なりの落書きを楽しんでいました。

その時のスケッチを基に描いた油彩の作品数点が色褪せて、今も残っています。

その後、薄汚れた人間味溢れるパリの裏街へと心は飛んで行きます。

哀愁の漂うその裏街の表現方法に苦慮している時、一冊の美術雑誌に出会います。その雑誌はアトリエ出版社発行の「アトリエ」(昭和五十一年五月号)、テーマは構図と色彩。

著者の作品を事例に“構図はバランス感覚だ！”“主役と脇役を明確に”等を解説(著者は国画会等で今も活躍中の佐々木豊)

ここ十数年、“不安定の安定構図”“主役を鮮明に”を自分なりに解釈し試みてはいますが、果たして作品に“自分流”が、どれだけ表現されているかどうか？

三十歳後半に衝撃を受けた、あの常滑を数年前に尋ねました。自分流？の画法で活気に満ちた赤茶けた煙突の街を作品に出来ればとの思いからでした。

しかし、三十数年の時の流れは街を一変空が雄煙で息づく風景はそこにはなく、澄み切った空、役目を終えた煙突群、立派な陶磁器会館、可愛らしい工芸土産店、整備された散策路等が私を迎えてくれました。

目の前の風景に昔の記憶を辿りながらの制作は、自分流表現の挑戦だと思っています。

(平成二十四年七月九日)

京都支部チャリティー展

神内　巍

去る七月一七日から二二日までの六日間西宮市の「ギャラリー雛」で第一九回「京都支部小品展」が開催された。今回は作品を販売し、売上の一部を東日本大震災への義援金とするチャリティー展である。

出品作品はS・M以下の小品とし、支部会員一八名中一六名が出品、絵画七〇点・工芸五〇点合わせて一二〇点が出品展示された。

作品内容は油彩・水彩・風景・静物・抽象・コラージュなど表現・技法とも多彩であり、さらに陶工芸作品も茶器・花器・酒器など多様な展示ができ、会場の雰囲気ともマッチして素晴らしい展覧会となった。

またチャリティー展ということもあって、会期中の来場者数は三〇〇人を超える盛況であったこと、また多くの購入希望者があり、嬉しい悲鳴の毎日であった。最終的に絵画で五割以上、工芸においては六割を超える成約があり、今回の目標を達成することが出来たことは、出品者一人一人の自信にもつながり、大変嬉しいことであった。

最終日午後四時から作品撤収に先立って反省会が行われた。出品点数が予想以上に多かったこと、またジャンルも多彩で見ごたえのある展示ができたこと、小品展ということもあり、大変親しみやすい、アットホームな雰囲気の展覧会ができたこと、また自分の作品が売れたことなど、よかった点に加えて、チャリティー展のあり方や作品価格の設定などについての反省点も話題になり、今後の展覧会のありようについて、全員が一歩前進の意義ある反省会ができた。

そして最後に、当面の目標である東京本展にむかって、全員が新たな気持ちで、作品作りに取り組むことを約し、解散した。

ボーリング画家　米国美術の革命児　ジャクソン・ポロック

シリーズ画家伝　大石　亨

今、世界一高値で売れる画家、戦後米国の美術界に革命を起こした画家ジャクソン・ポロックは一九一二年にワイオミング州の農家に生まれた。十八歳の時、家を出てニューヨークへ移住。地方主義の画家ベントンに師事した。

折から米国は大不況におそわれ、政府は画家救済のため雇用促進局を新設、連邦美術計画を実施した。ポロックは幸い壁画部門に採用され、なんとか画業を続けることができた。

同じ頃、画家シケイロスが「実験工房」を開設。これに参加したポロックは壁一面に塗料がスプレーやエアブラシで吹き付けられる壁画制作を目のあたりにした。これが後年ポロックのボーリング画法のヒントになったに違いない。

一方ニューヨーク近代美術館では一九三六年に「キュビズムと抽象芸術」展、三九年にピカソの「ゲルニカ」が展示された。ポロックはこれに強烈な衝撃を受けた。

ベントンを離脱し独自の画を目指すポロックは苦悩多く、つい酒に溺れ医師にアルコール中毒症と診断される始末。しかし絵にかけてはベントンを脱却、現代のあらゆる美術表現を貪欲に吸収すべく制作に没頭した。

一九四二年、大財閥ソロモン・グッゲンハイムの姪ベギーがモダンアートの収集のため「今世の芸術画廊」を開設、ポロックは「若い芸術家のための春のサロン」展に出品。その作品に感激したベギーはポロックと出展契約を交わした。

契約以降約十年間ポロックは大作を続々発表。ポロック独特のボーリング手法の抽象絵画が生まれ、世界中の画家から注目された。

ところが一九五〇年のある時、突然禁を破って酒を飲み元のアルコール中毒症に戻った。制作意欲は減退、画風も一変。五十四年以降は絵も描かず、ついに最後の事故死の日を迎えるにいたった。一九五六年八月一一日自殺にも等しい自動車事故で死亡。享年四十四歳。

36回展ポストカードに関して　(図録担当土屋政夫)

今回のポストカード代金は図録の写真を転用することで格安になっています。図録発行のない来年度も、格安のポストカードが出来るよう業者との折衝やシステムを構築する努力してまいります。ついては今回多数の図録・ポストカード注文数が要件なので、多くの方の申し込みをお願いします。

事務局から

＊表彰式、懇親会の出席返信はがきの投函をお忘れなきようお願いします。

＊例年と同様芳賀先生による画評を行います。ご希望の方:6日13:30分～15:00、7日14:00～15:30会場にて受付します。

＊京都巡回展実行委員長に小宮山委員が選出されましたのでお知らせしておきます。